

27 合田強の『賀川玄悦先生産書』の写本について

板野 俊文¹⁾, 中澤 淳²⁾¹⁾香川大学, ²⁾山口大学

江戸時代中期の讃岐の医家合田強(1723~1773)の『賀川玄悦先生産書』について述べる。

この写本は、合田家から約16キロの地、讃岐詫間の中澤家に本書の写本が所蔵されていた。当時、近隣の医師の間で医療情報が共有されていたことが推察される。

合田強(求吾)は、讃岐国豊田郡和田濱生まれ、父合田吉盤の元、医を修めたが、「充分ならず」と思い、宝暦二年(1752)から、京都で松原一閑齋につき古医方を学ぶ。更に宝暦六年(1756)から姫路より京都を経て江戸で望月三英、山脇東洋、吉益東洞などに学び、これを『医道聞書』として残している。さらに、宝暦十二年(1762)に長崎に行き、和蘭大通詞の吉雄耕牛に蘭方を学び、『西洋医述』として五巻からなる講義録を残している。我々は、これ等を翻刻して紹介してきた。

今回は、従来報告されていない、その後の明和二年(1765)京都に行き、賀川玄悦に産科を学んだ時の講義録について解説する。これは、おそらく賀川塾では、講義録として使用されていたものを写したと考えられる。ほぼ同様のものが、富士川游文庫(京都大学図書館)に所蔵されているおり、URLは<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000505>である。今回の学会発表では、これ等の内容についても言及するが、この富士川本と異なる最後の部分について、抄録に示す。

右一卷洛西賀川玄悦子編集其平生所試而秘蔵書也 予也明和二乙酉之春遊洛借□出於親友清水祥助者便小徒舍騰写之

西讃岐 和田濱 合田強書

乙酉四月二日清水祥助尋一貫街賀川玄悦子邂逅直聞之書

初産ハ三百日ニシテ生ル 是定法也 二度目ヨリ二百七十五日目ニ生ル 是ヨリ前ニ生ルハ皆半産也 是ヨリ過ルハナキモノ也 ○膿孕ノ七十日ニナレハ鶏印ホトアリテ胞衣モ早出来ルモノ也 七十日ノ形はカヨウニ小キ方下ニアル也 三四ヶ月ニテ孕ヲ知ル事臍ノ下ニドコトモモナク三四ヶ月ニナルト堅リアルモ一身分ハ潤テアルモノ也 潤ナキモノハ病身ナリ ○帶トイウモノ禁ズベシ産前後ノ諸病ハ多ハ帶故トシルベシ ○凡女十四ニシテ経過シ四十九ニシテ経絶は大數ナリ 吾モ女十二歳ノ四月ニ一子ヲ生ム 其女モ生テ后ニ始テ知テ驚シナリ 又五十歳ノ女ニ子ヲ産ム 又四十三ノ女初産シタルモアリ 不可拘ル子ノナキハ男子モ女子モトカムヘカラス 凡慮ニ及ヌコト疑ヲ□スヘキ也 ○産後ニ乳汁ノ不通ハ其女不順故アシキコト也 ○治産後反胃 以伏龍肝之汁煮小半夏湯用

折衝飲 當芎苟□紅延

膝桂牡甘 右十□水煎

脱衣散 知茯苓膠滑

當通膝葵枳中

右十二□水煎右

この中に書かれて「親友清水祥助」であるが、宝暦六年に京都に行った時にも会っており、『医道聞書』にもその名が出てくる。その一部を紹介すると、

○清祥云六経傳ヲ云疑シ傷寒ニハ始ヨリ熱冷ノ二症ノミ也 熱トハ太陽 少陽 陽明ノ証是也 冷トハ少陽 大陽 厥明ノ症是也 (後略)

○清祥曰山脇ニモ梅毒ニハ六物解ヲ用イ毒氣未盡ニハ再造加蝮湯用ユレハ十ニシテ半分ハ不解 由テ又五宝シヲモ用ユ (後略)

京都の学習塾を紹介した『平安人物志』には清水祥助の項は明和5年版、安永4年版、天明2年版に掲載されており、「源剛 字伯毅号沛亭 新町丸太上ル町」とある。

今回の発表では、今まで報告されていなかった合田強の産科の学習と、交遊について、明らかにする。